



連歌茶話殘編

5
3511
3



門 利 5
第 35 / 1
卷 3 止

連袂茶漢語編序
在相和尚代修く孫くしこの茶
漢のりく全書未んくし前漢後
二編は連く方めくくくまのくもせ
凡ゆる世々の漢語編のつては

連歌茶談後編序

毎相和尚ははるばるこの茶
談のりし書乎見たりし前後續
二編は連、分乃るる乎のまじ
起り終りの後編いつ終結

しんしんしんす 倭歌の字
くまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまの

くまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまの

あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに

連教のうへに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに
あつたはるはるのついでに

て 岨のふりぬの 唐あまのこ
く ぬのふりぬの 泊瀬のこ
うりぬの 多相言者ちのこ
野のひりぬの 沖崎の郷のこ
らぬの ぬのふりぬの

年らり此道と
夕あけのこ
十のあけのこ
うのいぬのこ
連歌十
百句の連歌詠

世々世々句と云らば
 松葉連歌
 百詰同茶談
 書し
 の茶談

侍者
 茶談
 松葉連歌
 百詰同茶談
 書し

夕月まらむ日夏茶葉
 又政家まらむ日夏茶葉

夕月まらむ日夏茶葉

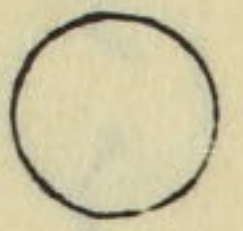
杏花園子

夕月まらむ日夏茶葉

[Faint, illegible text, possibly bleed-through from the reverse side]



連歌茶談殘編



拾遺集第十八卷よのせきるところに
れんがを四五句出さん
中將よ侍りる時右大辨源致方朝臣
のもとへ屋へお梅を打てつらむき
とて
右大將實資
流俗れいろよとあらず梅乃花



致方朝臣

孫をきとべた物とこそそろれ

まよーみねのよーかごぐむきめ乃

もとよつうをきとて

藤原忠君朝臣

にもひたちぬるきよよもあるか那

むきめ

かいらでもありよー物をまがきみ

ひろちこの沛息所内よまりりてを

そくわさらせたまひくれづ

くらさづーやまいさくでにきみ

とそろーけりれづ

同よやとぞわれもまちつるまの目を

巴上

○

檜垣姫集よ曰をたものどもあひまり

てよみぐさかるべきさを急をつけさせん
とてかくりふ

わづげとれ中よぞたてる掉鹿の
いでられぐを急つけよといつむ

秋乃山遠やそこにえゆるらん

已上

○

馬内侍集に女郎を此歌あきて次よ曰

さざれいろなるうしろとやさく

といひーうば

をみなへーつむ我身の野遠なれや

又曰きんまうれたとこそものちるなり

たろー梅乃花をふみよさうてをこせ

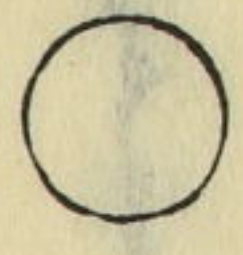
きれば

むうーよ似きるむ免れ花う那

といひたるうむ

梅れ花むりーのこをうたうへと
そら乃ちーされかたれるやちよそ

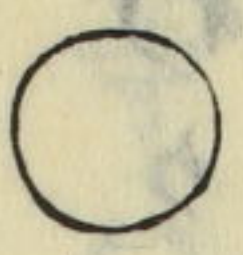
巴上



枕艸紙此人のいへつきくーたも
の段は日ふみこそなをめでたきも
のなれもるうなるを界はある人れい
みどくたぼつうなくいうならんとた

ゆふにふとをふればきこいまさーむ
うひきくるあうよたぼゆるいみどきこ
となまうー我思ふ事をかたやりつれ
バあーこまでもゆきつうざるらめと
んゆくらーちこそまればふみとり事
なうらまーうむいうにいぶせくれ
あさぐるらちせまろーよろづ事
たもひくしてその人れもとへとてこ

まぐとかきてをうつればたぼつう
 なさをもなぐさむ事さるにまうて返
 事ふのれむいのちをのぶべうめるず
 よこともりよやといり
 案むるよ連歌もかくのごとく案白を
 してたくれバ服白を付てうへへ平白
 をしてたくれむ次を付てかへへまこ
 とに文中れ一真なり



袋草子第三よ曰俊頼歌云

みみのうことたつるなまこひのりより

こひーき人もなみとたけーよ

故公實卿云ツミツノウミノノノ字ハヲ

ソロシクヲケルモノカナ後生ハ難置

字ヲト云云

故將作許ニテ左京被詠歌云

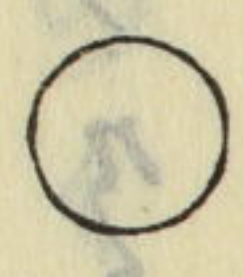
あふとみてうつればかひななれとも
はうななきまそいのちなりなる

俊頼當座感歎云人ハウツツニトゾヨ
ムノノ字油瑩ノ上ニハナアブラヒ
ク所也トテ深感之云云詩歌ハ只一字也
後拾遺ニ兼盛歌云

あさちよの秋乃夕暮なくむい
わりことさるにもものやかたす

我等ハアサデフニトゾヨムノノ字
甚深ノ字歟といつり

案むるよ連歌も先達此指南よきに
を直してのよ作れと申しなり



奥義抄中之下に曰

なをわさよわりれるたまのをぬきて
ありとほしといえらすやあるらん

け歌と和泉國よいままありとほりの
明神よまうでまうりたる人によるよな
まてかの明神乃あらまれてよみたま
つりたるとなんまうまこの神れ本辨
まむうーのみうど四十よりたいぬる
人をばとをたくにへをひつうまーあ
るまころーなごうーなまれたるよ老
まるたやもちまうりある人乃孝れら

ろふうくいて家の内をふうくありて
そこに屋をたてしこれたやをうくー
をきて日ごとよりさうりてをがみつ
まぐるあひざにならびの國れみうど
このくよをうちとらんとまるとくろ
ありてはうりことをうかぐちんとて
白木のうまもたなごさまにうけれ
るをもととゑあるーつけてた壺とて

つうへされたりみうど人をあひめて
とまれられどさらにある人なりこの
たところつち乃そこたたやのもとよい
たりてこのことをかゝるにりみあう
その木をたやき河よりうべむにをま
へ志もよなりなんとなしふそのよ
を奏しらればそのまゝにいてある
つうをせよよさりたれば又たなごさ

まなるくちなはをみつをくりてこ
れにめたところあるまづきよをいひ
たればさたのごとくこのたところたや
よとふにくちなはあつをならべて
其尾のかさにとをもへをさあてはめ
くちなはを尾をはたらうてんとい
へばそのよちよあうり又なくわ
たの玉乃わうれるあなをくぬきて

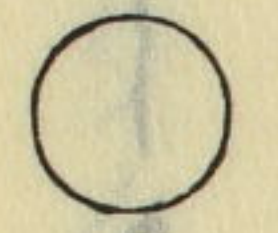
といひをくれり是をまゝとふは蟻の
こゝにいとをつけて玉乃くこあなよ
蜜をぬりてぬらぬかこよりちりをい
れよとりふそのまゝにまゝるよあり
蜜のうをかぎてとほまぬれをいと志
たがひてとほされぬかくてうへを
くれるにうのくに乃みうどをそれを
ちてこれくよをえうちとらずなりよ

りりみうどこの事をあやこてまぐ
ねたまふにあうくとやうれはられ
より老きものをつる事とままり
て人みなよろこびをなうりこのに
やとりふまうの明神なりさてうくよ
みたまへるなりといつり
案むるよ和歌よも連歌よも今の世に
四十已上を老とりよて賀しゆる事

いとめでたき政なり
更科日記は曰八月むりにうげまさ
よこゆるに一條よりまうづる及よ
ところるまふつむりひききてく
ものへ初はもろともにくべたひとま
つなるべし過て初はどいあんまの
のをたこせて

花みにゆくと君をえるか
といもせまればかゝるほどの事とい
らへぬもひんなどあれ

ちくさなるんならひに秋乃
とむりいはせていさ過ぬとい



西行此撰集抄第三は曰過り比こ
の方へまうる侍に船さう川を船よ

てなんわづり侍はけ船さし此かひ
をもとらで水はまうせて船をくぎ
侍うばなにとなくかく

みなれはほとらでぞくをたうせ船

と詠て侍うばけ船の中はありつる

僧乃かく

月此ひうりのさをにまうせて

と付て侍と云云

又第六は曰大納言經信卿俊頼朝臣等
乃人々にてをまのむえんとて大井川
をわづり峰はよぢ谷にくぎりてあそ
びなんどし結るるに阿る木のもとは
よはひ五十むりなる僧此禪定する
侍り人くむらぐまよりて終日夜をか
ら法文をぞとれける夜あけてのち
今もさのそある處さわざならねばは

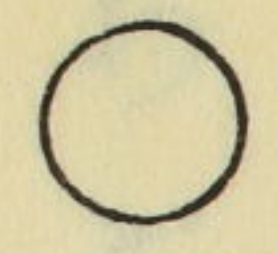
ひどまよとなきくわうれて又まい
 らんちんどちどりてのち俊頼卿かく
 なまてぞうへる喜乃あけぢの
 とのたまひまゐるにけひどまやぐて
 ちもらん秋をたれむ乃厚きよも
 と付きるにいよく思ひまゝてうへ
 へると云云
 案ずるよ是等れことも連歌よまれば

連歌なり初ふ乃ものも連歌なりとに
 もふなるべー初のも後拾遺集第十五
 卷雑部は載まるところに源師賢朝臣
 のよも歌なり後のも新古今集第十三
 卷迄歌は載まるところ乃攝政大政大
 臣良經公れよみ歌なり
 ○
 仙傳抄よ曰連歌の席に立花も案白を

ぞたらばその舞またがたぶるていに
立座一若きうずい松をあんよきて下
草に當季の物を用ゆをぐる異曲なる
よろしくらず
又云あんをべものをくらよをかき
ほんなりそへもれそへきるがよたな
またとへば
うぐひまの舞なうりせば雪をえぬ

とりよ上れ白よ

をまざというでまをあらま
と付まるとごとくそへ草をきることな
まのりといつり



後奈良院御撰何曾よ曰

祭白

三輪此山めりくる月をかげもあ

秋乃田の露にもあなる氣色う那
ほころる螢

○ 平白

瀧乃ひびくたにまぞにどろく
あいさ免

竹生 嵐よも山ももち
あやう笙

うそぎえーきる香ぞたえせぬ
らふも 朔日あさとへ晦日
わごせよそふもけまをくり
たくひやう武者乃軍評定
ひさ木枕

さーぬをこれとそむーきるからを
 霜をさて萩乃葉ぞちる
 つた月
 笹うさわけて鹿やふとらん
 傘
 山がらぐ山ををたれてこそことー
 からにー

いそがーぢよもあゆまぬものう
 ねりぬを練貫
 たりうさねきるなまをなまを
 たりぐを
 車乃うへよこーををとねり
 くー櫛
 長老れニまび寺を出たまふ
 ついうさね

六もささぎまきるるふ乃朝う南

身先のこころをたのぐら

和歌

春をはな夏も卯乃をな秋楓

冬はこほりれあさくぐるあ

たそひもさのみもくもこもるぬて

月をも日をもたぐまざりたり

御神樂

もろこしにまのむ社乃あれはこそ

まいらぬまでも身をばさよむれ

唐紙せうト夫集

ふくろくれくろくはなくて耳づくれ

耳よなれたそたうかりられ

あゆく急文机

宇佐もみや熊野もたなド神なれば

源氏物語

伊勢住吉もたをうかまぐ

うぐいと鶯

うーやまも足もをさめず古里に
うつりていゆく山路をりりり

まきくび木天蓼

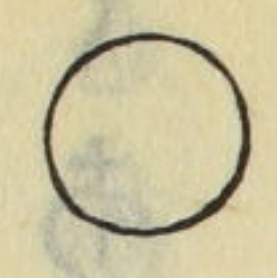
義朝もうーなき父乃くびをとり
ゆみとりなぐら弓を捨たる

ともちどり

たもふこといもできもよやをさぬべき
我にひとしれた人しなければ

たしき

已上



今物語は曰或所よて連歌の上手と
ゆる人より合て連歌しるるは法師
れまことにあやげたるがかみさぬ

連歌茶談淺編

十一

乃ほろくとあるうちさて縁の起も
よぬころ人と杞うと思ひたるに法
師あゝものも何よてやらんと問り
人くあまりよ杞うくしてなにとなし
くももとらず足もぬらさず
とりよぞと答へきりければ法師歩
て二三返むり詠じて面白くゆもの
う那といひたれむいぞ杞うと杞

ゆふよさらば悲れながら付ゆらんとして
名より杞ふ花の志ら川わさるに
と付きりたれば人と羊をうちてあさ
みりりさて法師といとまゆとして走出
るる後はは事定家卿をたまひてい
うなるものよととかへをぐゆう
くこそいうさまにてもきこものよて
よよもあらど當世を是ほどの白など

連段上茶談義編

つた

つくる人のありごとよきも何れ
も人をあなごる事あるまじき事とぞ
いれらるるといふり

古今集序よかきみをあられひ露を
なふとりのふを季吟註本に飛鳥井大
納言雅親卿そのうと將軍慈昭院殿よ
講釈乃抄よ曰あられひを何れみと

よるかたふをうなむとよむが
ひなりといふり

又第一卷春上乃抄よ曰法師のよき
を流布に出家をバ皆ほうとりの勅
撰などよき皆ほつとよむととい
ふり

又第二卷春下乃抄に曰或抄よ云山吹
ひ醪ド醪ドなり歎冬を山吹とりのふと誤な

連歌茶談義編

十九

本草歎冬へ落^{フキ}なり朗詠は歎冬誤^{テホ}綻
暮春風と清慎公醪^ド醪^ドを誤てりよよや
といつり

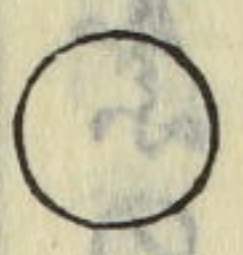
又第五卷秋下乃抄に曰ひのぢも刈田
よまた朽めるりねをりよ^{ヒツチヒツチ}稻^{ヒツチヒツチ}糶^{ヒツチヒツチ}りけ
もよむ字なりといつり

○
三代集此中よ今時と後べうらずといふ

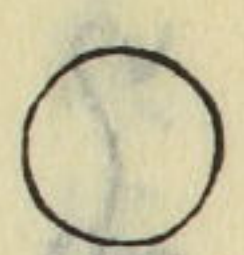
之類の類古今集季吟註本此抄よ曰ひ
ちてわびしきべらなれべらなり
べらなるにもほゆれ朽もほゆる
あぢきなくちるぞめでたき明ぞ
志にたるめどしよらんちりぬへみ
ほうらくしみつく△さくら
ちる袖よこさりれてまざれば秋
ざれば後撰集第一卷季吟註よ曰に

東次茶談後編

あひ香も今いよむまど記中とぞ為家
抄義といつり 拾遺集第七卷季吟註
よ曰むげよ定家卿云無下にとりよ
系物名の歌にあれども常此歌よと
むべうらずと云同第十三卷季吟註
よ曰ねるやねりそ定家卿云け云系
まねびて後べうらずといつり



後撰集第五卷秋上季吟註よ曰のもせ
とりよ云系も定家卿の僻案抄よ云庭
もせ宿もせ及もせ水もせくに
もせ是皆此面水乃托もてにみちて
あまねる中乃詞なりといつり



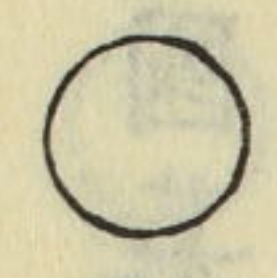
わがせこわきもこけ云系も男女よ通
トて用ゆるなり古今集第四卷季吟註

本此抄に曰 わくせこく衣れをそを
吹かへしうらめしき秋乃初風
そゆ歌も秋の初風のめづらしきと
いもんとしてわがせこく衣れをそを吹
かへさせてうらめしきとつげ
まり我せこ夫妻は通じて用るなりけ
歌も妻をいふなり男は衣れをそを吹
くへをとりふべしうらめしき定家卿云我肖

子我妹子夫妻通用勿論のよし存せり
なりうらめづらしきとわづれ乃詞よ
もかよひてうらかなりなどよむ同事
なり一條禪閣云うらめしきと記うら
悲しき同じことなりうらへんをいふ
源氏に一人も誰をいふとく大島は
うら悲しきと急乃きこゆる入とい
り

案むるは男此歌にわがせこそよ多る
と新古今集第二卷春部は唐人の舟
をううへてあそふてふりふそわうせ
こむかひらせよ又女此歌はわきも
こそよ多るも千載集第六卷冬部は
わきもこううもものこそ此水波は
さこそ冬はきちげし免りれ志くれ
ども多分もわがせこの女此歌乃詞を

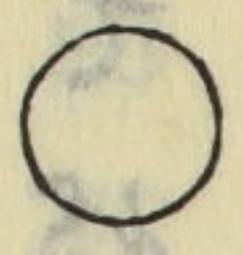
まわきもこの男此歌の詞なり産衣よ
もけ事ありといへども委しからず意
得るも今と違ふなり見合をべし



まくり手とりふと糸も後拾遺集第四
卷良暹法師が歌は神ふれは病は
れりりあきれ病はまくりてにてそゆ
くへりりるとりふを季吟註は曰

まくり手ハ袖まくりと八雲御抄ハあ
 り袋草子云住吉神主國基良暹ガ歌を
 難云まくり手とりふ詞ヤハある良暹
 云ヤ一ほの衣まくりてまくりて 如
 何國基云僻事也紅ハハまふり出とりふ
 事何りそれを書誤也良暹暫按又云
 風越乃峯より朽も 賤れたのきそれ
 麻さぬまくりてまくりて と傳るも是

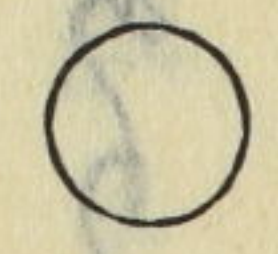
もまふり出を誤歟云國基閉口といふり
 案どるよは云系産衣も又えまれど
 も委しうらず



日本六十餘州此中ハ第一乃名所とりふ
 多奥州陸竈の浦なり古今集終卷季吟
 註抄ハ曰伊勢物語ハとをるこれと
 六条わづりハ家づりして山をつた

池をまきへたるよも陸がまのうらを
まねびつくられまきり在中將みちの杞
くまで歌枕をるるよ我みうど六十餘
州乃中に陸がまれうらよなんんをこ
めてゆるるところあるしゆるり記さの
くよれわりのうら丹後乃あまれそし
だてめもあやなりとてもうつされず
朽もひやるさへ哀に朽もりげよ立て

こそかぢりうゆるれ云云といつり



百和香も古今集第十卷季吟註本此抄
よ曰百和香ハ五月五日に百草を取て
合さる香なり口決と云云又後拾遺集
第十卷吟註よ曰百和香も和名乃香此
名の類よ云神仙傳云淮南王張錦繡之
帳燔百和之香といつり

文字と等相對してよめる事後撰集

第七卷よ

かみ屋ま山くたくりまくるれい
もちあかくそ秋もみえたる
季吟註よ曰曇るに對して施あうくと
よめりといつり同卷よ

なうつたの有ぬ乃月も有りなうら

なうなく秋のときぬへらなり

吟註よ曰あり何けの月へ省なぐらば
うなくと有無乃字を對して後なる
べーといつり又第十卷よ

おもともあやなうとのといたるれい

ゆるれうた乃そちこそまされ

吟註よ曰あやなうとりよに對して錦
とりよなりといつり又第十二卷よ

あさらうー秋のまぬれとえー人乃
くろたよそにありもゆくう那

吟註は曰くるとよそよなることを對し
てよめるありといつり又拾遺集第四

卷よ

あさらうーまきさちうくありゆけ
みりのまよさる年乃雪う那

吟註は曰新古のまよを對してたくみ

なる歌ありといつり又第十四卷よ

わきれーよまそちたりーまのまよ
うつにつらまふありたり

あさらうーと何よ命をたもひらん
わきれいあるくありぬーま身を

吟註は曰初の歌もゆ免うつし對して
よめり次の歌も新古對してよめりと

いづり又第十六卷よ

あつらひを年へくれともりつらよ
 我身のくこそありまさりけれ
 吟註は曰是も新古對してよめりとい
 たり
 案むるは予が案白四季二百題れ中に
 文字言葉對等の案白にほくみたまは
 け吟註ろくろよよめるものなり

○

たのめたるはこしひとて十四巻らみ

駒迎も後拾遺集第四卷季吟註は曰八
 月駒迎は信濃甲斐武藏陸奥等れ牧乃
 駒を内裏へあることなり前の集に委
 註といつり拾遺集第三卷吟註は曰こ
 まむへよまかりてとも八月に東國
 より牧の駒を貢するを逢坂へ勅使行
 迎ることなり是も八月十六日信濃勅
 旨乃駒迎なりといつり後撰集第七卷

吟註は曰むさりの御馬むらへとも駒
迎とて八月は東國より牧馬をなるとを
逢坂まで勅使立て迎へあるとあり延
喜式は云八月廿五日武藏勅旨牧立野
牧云云是なり年中行事歌合は云大か
た武藏の國よりハ秩父ハ御馬廿足小
野ハ御馬四十足立野乃御馬十五足と
しごとよなるなり云云といふり 曰ハ

案むるはこのことと産衣はもみえた
るといふとも少づ遠ふところ何
と見合産衣連歌とも駒迎駒引ともに
八月十五日ハことよして用ひきつれ
と産衣にりふぐごと
○
悦目抄は曰かなをえるとりふとの文
字なりの文字もやしらうなる中ハや

連歌茶談義編

三九

えらうなるかちうる二をえらむの
文字をとるべし又好むよむべき文字
七字ありさそ免てやさしき文字あり
しもよのやみむ 是等れ文字あり
忠岑忠見もともし文字を末よをさ
つればよはれどやさしといつり棟
梁もも文字白れ下にをたつればかち
らずつよくてまふつぐとちたる康秀

もよ文字を白れ下にをさつればうな
らずよむれど詞をつたてやさしと
いつり 遍昭素性も文字此下により
さていやむらうよをありてやさし
といつり中のきみもや文字を白れ下
よならべてかならずたくとなりとい
つり友則もみ文字白れ下にありて詞
をまことくる辨やさしといつりり人

丸貫之もむ文字ハたくとに字ゆると
いひたり人丸む文字ありてよ〜とほ
めきる歌

たの〜川お繋も〜れてなうるめり
わ〜ら〜〜たなかやたえなん
又初れ一字と終乃一字をく〜あり
は僕事ありそれもき〜れ歌もやとあ
れどもら〜るれろれ五文字ハ大事なり

誹諧より外ハよまれぬものなりその
徒歌よよきる

らちのうちよくらある駒のうちまけ
のれるを乃これむち乃うちから
ア〜んま〜のむをたむ〜の
經よむこゑもま〜とかりり

る

るり此色よさくる朝靨をさして

もうまたほとそ思ひいらるゝ

れ

れい此又そらき乃免さる人ゆへに

ろくろつくーて待れこそまれ

ろ

ろういたてみなとも志らぬ夕やみよ

ふ縁こそさつこを夜半の月志ろ

是より外のまを此沓冠もやとくよた

も待れどもけくゆありへらりるれ

ろ大車よたほゆたやくもよまれぬな

まといつり

○

三十一文字此歌の根元もさとのを乃

みこと此御歌なり古今集乃序よ

巻くもまのらつもやへつたつまこ免よ
三 やへつつくくるその巻へつたを
の文字とまりれ歌

吹まかぬ風をきこあき萩乃
うつりもゆくう人れころの古今
むうーあふね免のそよさとさくらん
初来もーらぬ月乃ひくりの拾遺
あらむれていとく漬くもえゆるか那

あやめもえらす流れりる糸の源氏
にちぎ文字なき歌

巻のうさ免みえぬ山路へいらんよ
あふ人こそほさーちりりれ 古今

五字あまりれ歌
ありそ海乃波まかき分てうつくあまれ
いさもつたあへす物をこそたもへ 八雲
四字あまりれ歌

われをうりものあひ人もまほしきもあらしと
朽もつて水乃下はもありなり 伊勢

三字あまりの歌

わつみ海乃沖津志ほあひにうかふちはの
消ぬものうらもるかこもなき 古今
冬乃池のかもれ上毛にをく志もろ
さえて物にゆふ比よもあるか南 後撰
ほのくと有め乃月れつたけに

お糸ふたたらを山たらし 此風 新古

和歌此浦や沖津志ほあひよううとある
阿たられ我身乃ゆるへ志らせよ 同

二字あまりの此歌も数多かれあり爰は
も出さず

五七五七と此五句乃一句とくにきく
みまふある歌

秋もあを今宵もこよひ月もつた

所もところろつる君もさみ 後拾
 ろくろこそころをさくるんちられ
 ん乃あささころちりり 奥義
 ねもふんねもさぬひとねもふん
 ねもはさらちんぬひちるへく 後撰
 貫之のほえられまゐる歌
 ねもひつめれもや人乃みえのらむ
 後とありせいのめさらまゐるを 古今

風あけをねさの志ら彼まつて山
 夜半よや君くひさりてゆらん 同
 俊成のほえられまゐる歌
 桜花さねよげらへもあへひさの
 屋ま乃くひよりえゆる志ら雲 古今
 月やあらぬまやむくへれなるならぬ
 我身ひとくもさ乃身よりて 同
 男をつまこよむ事萬葉集は松浦さよ

姫乃事を山上憶長がよめる歌

遠津人まのらさよひめ妻こひよ

ひれありしよりのをへる山此名

伊勢物語は女此よめる歌

むさしのもろふいなやまそ若州の

つまもことねり我もことねり

後撰集は在原季方が娘右近ひと此男

をあひありてつうとを歌

唐衣うけてたのまぬとをそなは

ひとれつまといふもろくら

和泉式部がよめる歌

けさへも思はん人もとひてま

つまなき聞乃うへというよと

公任卿和歌は九品をたてられまろそ

の上品此歌二首

ほのくさめ石乃浦此あさなりよ

—まうくれ新船を—とれゆふ 古今

喜まふのこいふさうりよや清吉野の

をまもかきみて今船とえゆらん 同

古今集中第一此名歌

宵め此つれなくみえ—わりれより

あうつたもりうりうき物もあう—

後鳥羽院より俊成定家家隆へ古今集

の歌のげれう第一きくるべさぞと御る

あり—時三人にあう—くは歌を古今千

首の中此第一乃秀逸なりとやうされ—

となり殊更定家卿の—くほ免られき

まどぞ

八歳此童女乃よ免る歌 五十五十一

神無月—られあるよもくるく日を

きみまのほとあう—とそあふ 後撰

九歳あるをのわらひ此よめる歌土佐

日記よ

こきてゆく船よてるれへ足引乃
 山さへゆくをまのちあらすや
 五音連聲れひびたよて五七五七これ
 白乃つぎ免くのつがひもなれざる歌
 ほのくをとをち乃外山よきなくなり
 志をーかさうへねくらさためて 竹園
 あさうさとみ森林乃本を急もみえぬ迄

たちくーり花れ香るーて 同
 もの一字よて急にたる歌
 志ら波乃あとなきうこは初船も
 風をたよりれーるへなりりり 古今
 重荷よ小舟をそへるとりふ歌
 どーのうきつまんとをたるをもよへ
 いとこつけをらりもそへなん 後撰
 紀貫之第一此名歌

選歌言及終

むさふてのまのくにはよこる山れぬ乃

あうても人よわうれぬるか那

は歌古今集第八卷離別歌季吟註抄

よ曰られいつらゆき第一は秀歌とい

つりと云云

定家卿一代乃名歌

あけの又秋乃ちやうとも過ぬへ

かふく月のをくたのこらへ

は歌此事兼載雜談よ曰後鳥羽院家隆

卿に今天下一の作者惟そと評あり

よめばまの秋乃ちも過ぬべは歌

をまむむらみよ書てたごてまうり

退しとちりといつり又細川幽齋口傳

聞書全集よ曰られの豪逸薈よて定

家卿一期は秀逸なりといつり

東及茶炎茂編

三十二

古來の人々此秀逸なりとて称美せら
るゝところ乃歌少く今爰よかきあひ
免をくものちより

さきさやよのありてるれい煙りまの

たみ乃うまといに記をひよりり仁徳

人乃親れろいやとにあらねども

子をたのふるよまといぬるうね兼輔

水無月のてる日乃親きさしなりら

聖遠もや秋のうらさなるらん忠通

省明乃月きよあれやほととぎさを

きく一夢れなくかこもえ藤頼通

五月雨いみみのこまた乃まこも州

かりほさといまもあらしとそあふ相模

本の葉ふちるやといまわくことそな記

志くれさるよもくれせぬよも頼實

住人もあなき山里乃秋れ夜も

月のひりもさひーくりり 範永
 沖津風ふさよらーな住吉乃
 舟のあけえをあらふ志ら波 經信
 朝すさた八重さく菊乃九重に
 えゆるも雲乃をるあうりり 長房
 ふもとをへうちの川勢をちこめて
 雲ぬにえゆる朝日登まう那公實
 いうをうりさひーからまー山里の

月さへまぬこのよをりせへ公圓
 池水よこよひれ月をやとーもて
 ろろれまーに我ものどるる 堀川
 あふさうへちまちとこそさーく
 ろろつくーのなよことありる 道雅
 武士乃やなまつくろふこ手れうへに
 あられまをーるなまを乃茶原 實朝
 山里乃秋れをゑよそたもひある

神歌言苑

かぢすーりりり木枯乃風西行
身よさむく秋のさよ風ふくたよ
ありにー人れまよみえつー人丸
あふさうれせだ乃清水よ新みえて
いまや引らむを月乃駒貫之
相坂乃園れ岩うとふとならー
をまたち出る切原れこまも高遠
おもけよ花のまうをさだたて

いくへこえきぬえぬ乃志ら雲俊成
かひらきやたうまの山れさくら花
雲おれよそよえてやをたをん頭輔
みよーの山うさくも星をふれ
ふもとろさとまうちーられつ俊恵
白雲とえゆるにちるー沛吉野の
よーの山乃花さうりかも匡房
香あれた木ことに花そさだより

連歌茶談

四二

連歌文語彙

つゆれをむ免とわきてたらまゝ 友則
百重の大官人といとまあれや
さくらうさゝてふもくらいつ 赤人
深山路やりのより秋の色ならん
又さうりー雲乃ゆふれれを 慈鎮
朝日影にゐくる山乃さくらを
つれなくさえぬ雪うとそふる 有家
うつりゆく雲は嵐乃こゑをなり

ちるう正本れうのらた乃山 雅經
本枯やいうままちえん三輪乃山
つれなき枝乃ゆれをれのこゑ 具親
葛城や高間れさくらさたより
まのの奥よかゝるーら雲 寂蓮
人をまぬふとの園をれ板ひさ
あれー後まきく秋乃風 良經
秋の日はいとよりよをたさうよの

連歌文語彙

四

くも乃ちては萩れ上かせし正徹
かゝるさの物とや人乃ちなむらん
まのよなうらの宵明乃月定家
わされちんよにもこちのうへる山
りしと人とおはんとをらん伊勢
山里を夢のまうた乃へたてすの
をちうひとの袖へえてす好忠
わうやとのむえうてらにまゐる人を

ちりちんのちそこひうるし躬恒
かそめれの我身よつゆる年月を
をくりむよとなにいそくらん兼盛
くみこすのあさとをむとそありなま
きえすはありともむとえすや業平
たのみとひらよと書てあさと川
なうれてたやの月日なりりり列樹
ちたやふるうもの春らね姫こまの

東坡茶談殘編

四十四

御歌之詩苑

ふろよふとも色ははら— 敏行
きらちめのかれとて—もうと玉乃
わうくろかみをなてとや有らん 遍昭
あさまいたら—の山れきあれた
ちるみきくをきぬ人そなた 公任
くらきよりくらたよそりぬへき
はるうにてらせ山乃とれ月 月泉式
うくひきの初喜や何乃色ならん

きけの身—むま乃曙 孝善
うきくみよりく玉つさそえゆるう郷
かきとれやよりへるかりうね 國基
うつらなくまの—入江乃濱風よ
ねをな波よる秋れゆふくれ 俊頼
長月の十日あまより乃みうれ原
川波さよくをさる月うね 家隆
山寺乃まれゆふくれきてるれ

連歌茶の巻

四十二

けりあひの種よむそちりなる 能因
 萩もなま袖にうけて高家乃
 木のへれ宮にひれあるやまれ 頭昭
 花よあるへくるさものを真木はをよ
 やさくもさくる初志くれう那 讚岐
 さみこそすひひそりやねちん世れ系乃
 みやまもそよにさやく霜夜を 清輔
 宵明乃ちこそさくれさうつたに

日影もそひてあぬと朽もへ 能宣
 あまの川ちよた乃風よ巻られて
 そらとみ流るかさくたの橋 元輔
 ありよなる松ものいそくそひて
 むうもかくや住乃えれ月 實定
 さうりくささくくな啼そ秋れ夜の
 虫さ朽もひわれそまされる 素性
 草の庵をなよつゆけと朽もひらん

もらぬ岩屋も神もぬれたり 行尊
あま乃川うわへ涼——き七夕に
扇れ風をなををやうさす——中務
さうなみや志賀乃都へあれし——を
むう——なからのゆさくらう郷 忠度
あや——くそうさう月れ曇うし——
むう——かろりに夜やあけよらん 行遍
ゆさやらて山路くら——つ郭云

しまひことあ乃あうまほ——んよ 公忠
五月やこくらう——山のほさうさ
たろのうなくもなだわさうう船 實方
あふうささるよそあるた山里も
われよりさたよ人こさうらり 經衡
山ふくみねちてつもれるおきあくの
かまらるうへに時ああるちうり 嘉言
あふまてとせ免て命乃たれ——

直入
歌
本
言
及
終

四
六

こひこそ人乃いのちをりたれ 頼宗
 我のこもちもひーくとも高砂乃
 たれへ乃松もまゝさきてりたり 義定
 たのみていひさーくちりぬ住吉乃
 まのこのたひれあるーえせあん 赤染
 夏山れあをまゝまーま乃をそとくら
 ちのむよりもめらーたりぬ 盛房
 まくまひよめつらーたれいほそたを

りの初喜乃こちこそまれ 永縁
 ぬれくもねうりゆかんをー喜乃
 うも毛れをうちをらひつ 道濟
 まちー夜のふけーを何よなまらん
 ねもひまえても過ーる身を 越中
 よーさらつらさの我は習ひりり
 たの免てこぬい作をー 清少
 都よいゆのまゝよてえーくとも

おきちりーくまらうへのせた 頼政
 あら夜をいせ乃濱萩わら志きて
 いもこひーらにえつる月う郷 基俊
 かねてよりあひーことそあーい本乃
 こるえうりあひるあけあせんこー 加賀
 あゝもーにわもひさえちん煙りたよ
 あとあはる雲乃もてそ悲ーを 成女
 神のうへは惟ゆ八月のやころるそと

よそよあひーても人のとーうー 秀能
 まのよひよあけゆく種れあうきあを
 あうぬわうれ乃とりハ物うはく小侍
 さくやいうにうも乃あなる風たよも
 まのにをささるお習ひありとを 宮内
 みちのへ乃草れ喜あよ駒と免て
 なをふるさとをうつりえるう那 成範
 神代よいありもやあらんさくら花

うぶのうさーは朽れるためーを 紫式
山ふうとまとも志らぬ松乃戸に
をえくかくる魯れたまみつ 式子
あまの原もるうにひとり極れん
たもとに月乃出よるるう南 増基
あさちふや社よくちうー秋乃露
わきれぬまをふくあらー船 通光
石川やせみの小河乃きようれを

月もなうれをきしゆねてそまむ 長明
こぬまでもむゆへ人乃まゝれつる
まもくれぬるみやまへのさと 伊細
あふちさく外面乃本うけつゆ落て
さみたれたる風わゆるなる 忠良
まとちうたいさく村竹うせみけい
秋に杞とろくちうの夜れま 公継
さは鹿のあさきしゆをのあさ萩よ

東坡茶寮漫編

たまごころのまてをける志らつゆ 家持
 ゆふされハ玉ちる時逸乃女郎を
 まくらさためぬ秋うせそふく 良平
 笈士よまてこそくもん 水上
 いうたうりふく山乃あらーそ 資宗
 さうりともとたのむんれゆくを急も
 朽もハーらぬをまうをらん 季保
 時あうとさうけハ本のまふのある物を

それよもぬる我たもとう南 資隆
 白波にちねうちうをー濱ちどり
 かちすーたものハ夜半乃ひとこ急 重之
 子日ーて志めつる燈ハのひ免小松
 ひうてやちよ乃陰をまうさすー 清正
 君う代のちとせ乃敷もうくれなく
 くもらぬをれ日うりよそ又る 顕房
 ねく山乃ねとろうあうもふとわけて

乃あるをそと人よりらせ葬 後鳥

已上九十五首

○

八代集巻頭此歌八首をゆさん

古今集

在原元方

年の内よまをま来にりりひとせを
こそとやいたんこととやいは葬

後撰集

藤原敏行朝臣

ふるゆそののみ乃志ろ夜うちさつ

まをにりりとたとろくれぬる

拾遺集

壬生忠峰

まきのとりふたくりよやみゆりの

やまもつをみて今朝いんゆらん

後拾遺集

小大君

いふよねてたくるあしたにりふことそ
まのふをこそとらふをことと

金葉集

修理大夫顯季

うちなひをまへにまよりり山川の
いたまのこほりなふやとくらん

詞花集

大藏卿匡房

こほりぬし志りの辛崎うちとけて
さくなみよさるるま風そふく

千載集

源俊頼朝臣

まのくるあしたの原をえわのせ

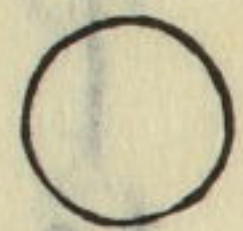
うきもろふそたちをくせらるる

新古今集

攝政大政大臣

みよのい山もろきみて志ら雪の
あつしよにまへにまよりり

巴上



新古今集れ中の三夕乃歌を出さん
さひーさの其色くもなうりり

まきさきの山は秋乃ゆふられ 寂蓮
くろちまき身よも哀へえられり
一記まきの沢乃秋はゆふられ 西行
えわさせの花もお葉もなうりり
うられとまや乃秋のゆふられ 定家
又六玉川は歌を一首づゝ出さん
駒とめて程水かちんやまふきの
はなれ處そふめて乃玉川 新古

みわさせの波のえうらゝかけてり
お卯れそなまき玉川乃里 後拾
玉川よさらきとてのくりさらく
むうーれ人の意ーさやなそ 拾遺
あきもらんお路は玉川萩こえて
いろなる浪は月やとりりり 千載
ゆふされの塩風こーてみちれくの
お田乃玉川ちとり鳴なり 新古

東次茶寮後編

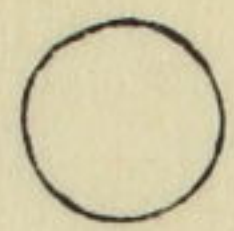
五十四

わさられても汲やあけらん旅人の
高野乃にこれ玉川乃水風雅

已上

案どるよ毒水も紀伊なり千も陸奥
なり萩も近江なり調布も武藏なり
むらも攝津なり歎冬も山城なりこれを
あけ免て一首よあつる指南歌なり
むつちどりむさしとてけりあふと

だ山やまぶきに津に卯紀乃毒云云



拾遺集第七卷に物名の歌乃中よ松茸
蒟蒻れ歌あり十二支乃歌あり九文字
つだきる歌三首あり

まのだけ

あひさの山下水よぬれにり
そのひまのたけころもあふらん

こにやく

おをえられいまめさよらりあををつら

こにやくまうーわうなつむへく

吟註よ曰らんよやくななり蒟蒻コニヤク和名云

文選蜀都賦注蒟蒻其根白以灰汁煮カ凝

成ニ云といり

子丑寅卯辰巳

ひとよねてうーとらこそいあひけめ

う地名まの身そわひーうりたる

午未申酉戌亥

むまれよりひつーつくれい山よさうる

ひとりいぬるに人ぬていませ

吟註よ曰初も憂ーと等ななり一夜終て

憂ーなどたもへばこそ又もこぬなら

めども我一夜よても名の立ッ俺ーを

とちり次も僻案抄よ云ひ第二句更よ

後とうず若櫃ー作ればよやつてたて
 もゆえず云山よさるも去の字よや人
 おていませい人をひきぬてたてーま
 せとりよ詞なりまことに第一第二句
 ねえ前後心よくつづぬよやとら
 たり

あらふねのみやーろ

くさももみまことりなるふちつり

あらふねのそやーろくえゆらん

くちばいろのねーき

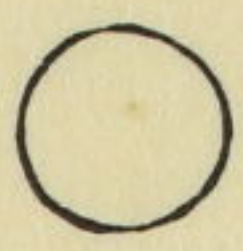
あーひきの山ね乃ものねちくちひ
 いろねにーきをあちれなりなる

かのうをねむうはだ

かのうを乃むうはきをたてふくらひ
 わらてきくにうつるをうりそ

吟註よ曰かのうを乃むうをねち鹿皮

行^カ騰^ギ行^カ騰^ギともかく足をつみて身^ヲ
 るき^ニあ^リま^りて旅行狩場等此具^ヲ
 歌のころも^ニあ^リ此川乃向^カ所^ギを^シてふ
 うくあらばと^モなり僻案抄云むうを^シ
 へ九人のむうひをねとり^シふ事をよめ
 るよやと^シつり



拾遺集第五卷は六月晦日は茅此輪を

こゆる時に唱ふる歌

水無月のなこ^レ此をらへ^スる人^ト

ちとせ^レ乃いのちのふと^リふなり

季吟註は曰六月秘ハ疾病消除悪鬼降

伏等此功德あればなり六月晦日に茅

の輪をこゆるよも^ハ歌を詠^ズる^ル

公事根源は有りとい^フり又後拾遺集

第二十卷に

あふことみなつらねとて麻乃糸を
さうりよぢりてもたらへつるう那

吟註よ曰公事根源六月大枝よ法性寺
関白記よまけ歌を詠どべーとみえを
そ云といつり

又拾遺集第十八卷よ灌佛此事あり

灌佛のわらをえ侍りて
からころもまのよりたつる水ならて

わう神ぬらまのやなにちる

吟註よ曰灌佛のわらを本云灌佛日女
御之布施童女持叅殿上人扶持如五節
うらころもまのといちん枕詞なり
唐衣まのよりたつるとも公事根源云
け佛生會ハ推古天皇より始まる釋迦
如來の俱毘藍城よて生たまひくる時
天龍りりて水をそくたて釋尊よあぶ

せなまり一事をやりあがり云云されば龍よ
まにつる水とも灌佛會に龍口より水
を出さ事あるをよめりその水ならで
我神ぬらまの何そや君よこそ阿れと
なまりといつり

贈答のなまりといつる歌古今集十二
十三十四巻歌よ三首有り爰に出さん

小野小町

をろうちるるなみこそ神よたまひなまを
われいせさあへすたさつせなうれい

在原業平

あさみこそ神いひつらめなまの川
身さへなうるごさうはき乃まん

近院右大臣

いまいとてうへを云れまひろひ置て

をのうものうらかこみとやえん

已上

又後鳥羽院より定家卿よ古今集此秀歌十首撰ひてまいらせよと作出さるゝとき乃歌

本歌業平

なまきわゆる雁乃なまこやちちつらん
物たのみやとれをたのうへ乃露

紀貫之

志ら霧もしくれもしくくゆる山こ
下葉のこらすいらつたより

菅原朝臣

秋風のふきあけよたてる志らきくえ
はなうあらぬうなみ乃よとるう

坂上是則

あさほらけりり月とるるまてよ

全哥言及終

よーのーさとにふれる志ら香

壬生忠峰

宵明乃つれなくみえーわうれより
あうつたをうりうき物へなー

後人志らず

なとり川せく此埋本あらちれて
いっよせんとうあひえそめらん

在原行平

わくらほよとみ人あらつとまれば浦は
ゆーほまれつちふとささーよ

後人志らず

たうみそきゆゆつけるうからころも
まゆののゆはちりてへてなく

巴上

又古今集誹諧歌少く
む免のたまえよこそまうのれ雪乃

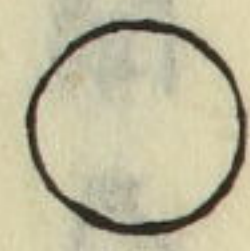
連歌茶談幾編

六十三

ひさし〜とらあひ〜もあまの
いづくに田をつくれぐうほら〜あま
〜でのいさをあさなく〜よぶ
秋風にほころびぬら〜あまを
つ〜あませて〜あつぐ〜さをなく
枕よりあまのいそ乃せえられ
せむ〜なみぞとこあうにをる
み〜の山乃口あ〜えて〜

おもひ乃色れあ〜深にせ舞
人よあまんつたろなきに〜あひを
むね〜あまひよん屋あ〜り
われを思ふ人をおもむくひよ
我おもひとのわれをおもむ

巴上



千載集第十八卷 誹諧歌 六波羅密寺

連歌茶言及終

六三三

の講れ導師よて高座にのりるほどよ
聴聞乃女房ありをつも侍りらればよ
ぬる

良喜法師

人乃足をつむよてありぬわがさへ
ふみをこせよとわらふなるべし

季吟註よ曰六波羅密寺と天曆五年京
よ疫病をこなむれ人あまさうせまり
しに空也上人憐みてまげうら十一面

観音此像を刻て祈たまへるよ疫病止
まどぞ歌乃ふも瞑想よてありをつ免
るをいひあらそしきるべし文よ踏を
そへきり又云山寺にこもりて侍る
時くろある文を女乃もとよりまむ
くつうをし侍らればよみてつうを
しる

空仁法師

ねそろしやそそのけぢの丸木橋

狂歌合言及

ふみふるたびよにちぬべきう那

吟註よ曰られの序歌なりんある文を
こせーをにそれいまーむるころな
るべーは法師などんをどど免てえ
るべた歌なるべー女人と地獄の使と
いづりれするべーつゝ志むべーと云
○
狂歌合よ曰け歌合も初まれば此巻にそ

むらる貧客どものつれぐら乃あまり
は狂歌をよみて左右にわうちつがひ
ゆるあるべーと云云
案どるは狂歌合十番あり其中乃六首
を出さん

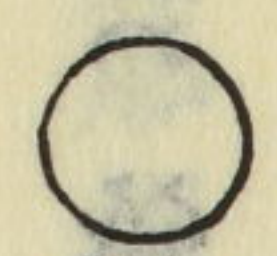
節分よばあそこなひてふる衣
さきふるまこそたうーかりられ
錢米とてがち拂て身

連歌茶本

六十五

をとり所なれた年をこそとれ
朽もひね乃ほどもとけくー正月れ
もちぬをくふと後よえーうぬ
正月も牛房むりの尾をありて
いなむとせーをくるく大根
下部ども徳よ福よといをへども
なをくひきらぬいひわけを
三世心不可得よていひぐさた

正月もちにむせてまなむや



御裳濯川歌合序藤原俊成云よをひか
たふに老よのぞみて後と朝にるるこ
と夕よいわをれよはのむーろよ朽もふ
こと暁乃まくらにいこもまることな
りれば古よ時れ徳歌今のを乃徳作え

和歌名詞及

六十六

る事さくこと一もろくろにのこる事
なりと云云

又釋頭昭此和歌名葉集序曰聊八篇
をもて粗萬乃要を挙む一よハ和歌縁
起二よハ種く名新三よハ避病次第四
よハ詠作旨趣五よハ撰抄時代六よハ
名譽歌仙七よハ通用名言八よハ難歌
會釈なり是ヨ和歌の名葉製作此手本

なりられをまなびさとりなむ詞を
得む者歟と云云

又藤原清輔奥義抄序曰詩ハもろこ
一のつゝハ歌ハわが國乃ことむなり
きくもたをぐうらねどもむきハひ
ちのなるべし短歌ハ賦なり長歌ハ五
言七言ハ詩旋頭歌ハ江南曲混本歌ハ
越調乃詩聯歌ハ聯句なり回文まゝか

連及茶談

六十六

よひてありをよそなむらふるところ
ことある事なりと云云
○
頓阿れ高野日記は曰こよひも細元乃
庵は舎り侍られバ扉ちかうならべて
七十もたけ給へる海象といへる僧
のうちをいさよ粟れいぬ志そひいほ
なごりふものごりそへ十二三むり

此小僧もてくきり夜半乃あらしを志
のぐまで此をどり所とこそ思ひたべ
る一都のきびくろさわだよをの介
になり初てかゝる清もてなりをきて
人の身此上よめげらう侍るとて
四人身をそば免ぬてくふさて海象の
縁ある事どもものさまふ中に大師け山
をさうひらうせたまひてきてさせた

東次茶談義編

六十八

まふに木のみち此きくと文字のこと
をあらねばある一あまきべき料もな
しとていろは四十八字をく一へさせ
たまひ一より末のせ乃人のまをけよ
もなまぬるなきこえゆり一うばさ
らむとあひていろはを冠よをたて四
十八首をつゞま出ー影前にそなふ
らくといひ苦とりよこもあらぬ身ハ

罪もをそれすみさも頼ます
まんまゆをも我ま一なこよ思ふなる
むうへとらん乃ちうひたれみて
るりれ池乃思ひをられてゆう一さハ
こほりよまのむ水の月か
れうもふ一虎もうそふく山一て
御名をとなへたそるへさうハ
ろもうひもわれらへとらて法乃みち

連及茶の巻編

六十九

まゝに船ぬゝをたのゝてそゆく

已上

○

夢庵記よ曰宗叱渡唐一侍一彼國よて
夢庵れ二字を仲和とりふ宦人の能書
よかへせてもて来り侍りたもひげけ
ぬ事よて感情淡うらず
かゝこゝなもろこゝまても筆よたゝ

ふしてそ先なるゆめ乃庵ハ

又宗輔同ふには庵号の唐筆をえせ侍
る一人れ國までたもひ忘ざりたる事
とにほえて
水くまようけ一契やたくひをた
えぬもろこゝ乃及れ庵を

已上

○

吉野記曰千本乃さくらとて數あまたあり

吹ませてふうきやしのれ吉野山
千本よにあふ花乃ちるうせ
又四本乃さくら又蹴鞠れ奥朽もひ出て
鞠場よりつー植をんみよーの
四本乃さくら朽もけりて
又神振山も天武天皇れ御琴を弾た

まひーよ天人あまぐりて女子れ歌
をうきひ神を翻ーたる所なれば
むうーをもうへとやいこし女子う
花乃神ある山風そふく
又西行ざくらもけ法師れこの山よ三
年乃間をまぬせー所なりと語りーう
べ花ちりなばと後ーまの葉もけ所な
らんうー

となに入ておもひえられぬ芳野山
 やうて出ーといひーこと乃系
 又潮日もかゝふさぐれば麓れ里また
 ち帰て藏王権現の前にさくらを三十
 本植させて
 りうのうの十といひつゝ三芳野乃
 さわら植をさー花を来てるん
 まへに巴上

○
 いほぬまよ日神無月の比熊野に神山
 よつたてさふらふほどに霜月廿日此
 ほど乃あままうでなんとてをさあ
 川のつらよあそび人志をーさふら
 ひきまへうー神もゆるーまえ給をー
 などりふほどにうーらまろたからを
 ありて

山うらさがーらも志ろく成よりり
我かへる魚つた時やさぬらん

已上

案むるよけ歌と後拾遺集雜部よみえ

きり鳥頭白き季吟註云



乃ゆきぶまに日ほりまぢよ志うまれ
さとしりふありかちむをこーへだ

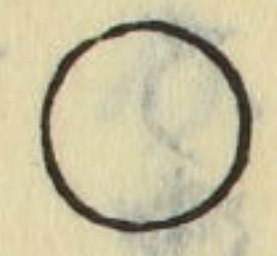
てきれども川なみの海に出まゐるあー
たもるうよえわさされなにそなくた
も志ろー又いさく初過て川のほと
りちうく石れ塚ひとけり是も神乃
いまを形なりりり出雲路れ社の津前
よえゆるものかごども二三侍りー
をなにぞと尋ーうばげ乃ををど免て
とをる旅人またうきもいやーたもか

あらずられをとり持て石の塚をめぐ
まてのちねとこ女乃ふるまひれま祓
をいで通る事とやういふことかこを
らりうねわざよてなんゆりう那ま
ことやい神の本社もほどちうま取の
うみ乃中よたちままひいふるがかろ
にまなびゆるまじごとよ御社乃ゆる
ぎゆるとなんやめりあらうたのること

あまのづー

つたうさく神代乃みとのまくをひを
うのきちうひれほごもかーこー

巴上



艶詞よ曰あらたまの年月をくくりむ
かめるにつけてたゆみ事なほいも
あらぬ身れ人あらぬ意地よさへあひ

りりぬるよーなさをこそなほ事此あ
 りさまぞとにもひあまり乃なぐさ然
 に昔此あとをまがぬればちをやある
 神乃神代よりみどのまくばひーてい
 もせを思ふことたえずぞ有らうーそ
 れよりこれかさゆー世をへて志ぎ乃
 ちぬがたをうぞへ千まで綿本をた
 てふの煙をわがちもひよりまのう

とたどろた清尼が関の志ら波の神ー
 の浦よりまちよるうとぞさたぎあ
 るせりつむ人もつりまゐるあまもわた
 もてがた然よんをつくまといつり業
 平乃中將も我身ひそめをもこの身
 にしてこゝな一みそ一ゆさ乃兵衛
 此かみハ後乃うよひぢくめよくらん
 そうらくまうり三輪此山ないうよ

まちえん 伊勢此ことをちり 色
 みえてうのろふものい 小町がたも
 ひたるべーさぞなむうーの人だも
 かへるあひのありけとちもひそれ
 どもとられぬを過すーかさよりふ
 までにつたぬちもひろくをくをも
 ーほ草かきあひめさーかよ乃いとを
 ーともやりふとてなるべー

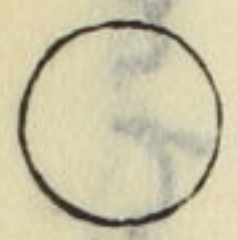
人あれすうた身よちけるあひくさ
 ちもへの君そを縁も申さるる

大御お已上



ちもひ此まゝ乃日記よ日卯月八日の
 灌佛などちれい乃事ちればかきと
 欠ず文月七日も七百首此詩七百首乃
 歌七調子の管絃七十韻乃聯句七十韻

の連歌七百此うむのまり七らん乃沛
酒をりさまぐれい此事なれば注よ
をよむず師走の佛名なごりみ事あ
たく見所なる事なれど近衛の陳此か
つたのなごりみ事あつたよかたら
ず大將れあひまひなごりも志ろ
一僧どもふさまわつたなごりつてん
ちよげたのふまひとたうと云云



うきね此記よ曰さてこの所をる
にうたをなぐらかゝるところもあり
りるときごくあひさまなるよをこな
ひなれきるあま君たち此よひ曉此あ
うをこたらず爰うこよせぬれい此
をとなどをまにつけてもそごろよつ
ゆりらん年月のつみもかゝらぬ所よ

てやとなます〜うむい〜にせま〜どに
もひあるよぞみもゆる〜ち〜なる
古里此庭もせにうたを志らせ〜秋風
のほげ三まいの峯此松風は吹うよひ
ながむるかどに面うげとえ〜月新と
まやう〜ゆせんの雲ぬむるうに心を
くるあるべとぞなりよなる
まて〜出〜わ〜此と山乃月ならて

まをれをよなく〜急わ〜りらん

○美四年秋月廿六日中門外跡へ

長明方丈記は曰をよそ物の心を志れ
る〜よりけう〜四十何まり春秋を送
れるあり〜に在此不思議をる事や
たびく〜よなりぬ去〜安元三年四
月廿八日うとよ風をげ〜吹て志げ

うならざりし夜戌の時むり都北た
つみより火出ありていぬぬよ至るは
てよも朱雀門大極殿大学寮民部省な
どまで移りて一夜乃程に塵灰となり
よき
又治承四年卯月廿九日中御門京極乃
程より大なる辻風北よりて六條わ
るまでいりめくふる事傳る三

四町をうけて吹まをるまくに其中よ
こもれる家ども大なるもちいさ地も
一としてやあれざるはたしなながら
ひらにきめれたるもありあさそしら
むりり残れるも有り是をとりつくろふ
間も身をそこなひてうらわづけるも
の敷をえらず
又たなご年の水無月乃比にむりよ都

遷御の言

遷御の言と思ひ此外なり一幸なり
大うこび京乃始をきけバ嵯峨天皇此
御時都とさごまりより後まで
は四百歳をへまじりことなる友なくて
たやとくあらさまるべくもあらねバ
是をを乃人たやとくならず愁あへる様
ことちりよも過まりされどくくりふ
うひなくて御門より始までまじりて

大臣公卿悉撰津國難波北京は移りた
まひぬうのり住人も残居れるものも
その歎きをくなくならず是をを此乱る
瑞相とう笑えらる

又養和此比うとよ久しく成てき
よも覚えず二年の間在中飢渴して老
若男女此飢死するもの其數をえら
仁和寺に慈尊院乃大藏卿隆曉法印と

連次茶

八

いふ人々くくつて數えらばず死ぬる事
をかたしめて聖をあまるとかこらひつ
その首北にゆるごとく額に阿字をう
けて縁を結むしむるわざをなんせら
れらる其人數をえらんとて四五あ月
がほどうぞへきりりれば京の中一條
より南九條より北京極より西朱雀よ
り東尾の邊にある頭をべて四万二

千三百餘りある況やその前後
に死ぬるものもたほく河原白川西北
京もろくの邊地などをくまへてい
まゝ際限もあるべからず
又元暦二年北比大なる地震して堂舎
塔廟一ごとくまらさうらさく或はくぢれ
或はきもめれ人畜北損亡たほく毎日二
三十度ふらぬ日もある十日廿日過る

一うばあうく間どをにちりて或ハ
四五度二三度も一ハ一日ませ二三日
に一度など大方其名残三月むりりや
侍りらん
又折一期の月報かゝあたて餘葺山此
端まちう一忽に三途乃闇は向らんこ
を何のわざをうかこまんときる佛此
人を教たまふをもむきも事よあれて

執心なうれとちり今草れ庵を愛する
も料とを閑寂は恙するも蔭なるべ
いづ用なき樂みをのべてむなしく
あゝら時を過さんあけうなる曉この
ことちりをあいつげてみづうらん
よとひていたく世をのぐれて山林に
まじもるもんをたさえてるをりちん
がそめちりまうるを姿ちひド子に似

てふまにぐりよふめりをみうへ則浄
名居士乃功をけがせりといへどもた
ゆひところへわづかに周梨槃特が行
まども及むず若是貪賤此報のみづか
ら悩まをう將又忘心此至りてくるは
せる類う其時ふ文よ答める事なりま
かゝらる舌根をやとひて不徳此念
佛あ三返をやてやとぬ時は建曆乃二

とせ弥生此晦日比桑門蓮胤外山此庵
よしてこれをあると

月うけへ入山此端もつらうり記
きへぬひうりをるうもう那

已上



高倉院嚴嶋御幸記よ曰弥生此廿六日
宮嶋よつうせ終ふて大宮へまいらせ

給淨ほろふいとて淨をやう供養あり
金でいの法花經一部壽量品壽命經淨
手づうらかへせたまひらる淨導師こ
もん僧正ありてげしを中上らる九
を此ちやうをいでてやへの志ほぢをわ
あまいらせたまふ淨ふざーかなんとい
人も神をまがりあへず
又廿七日よそらの氣色うらうにた

れわたりてのらり乃當おもてぬ深山
此木うげよかさらふまを夜をこえて
志ほろのこて淨取の前までさーりり
きふる微よこのを乃有さまともみえず
供淨なごえてすーくバ淨宮めぐりあ
るべーこて宮へまいらせまふらふ
まぬの淨あやう衣をぞ免ーまゐる國
れうみごもまいらせまゐる宮のまへよ

はこびをくらうれまへに樂屋をつく
 きて拜殿をたてまり内侍ども老まると
 若きさまづくあゆみつらなりて神供
 まいらをとりつゝたてがくどもして
 御戸ひらきてまいらをそれてく夜
 よ入にーうばこよひ御つやあるべし
 きてまいらせまふ内侍どもあひま
 きて夜もまがら御神樂ありふくる程

よ七になるこ内侍あるよ神つうせた
 ちのふてまじ免いまあれあて時中を
 うりたつりうーたとなしーた内侍ど
 もかへしてほどへていさり御神樂
 つかへまのるべしうーたほせられて
 神主めーいごへさまづくの事どもや
 ちるめもあやよしうにどういづひを
 なさ人もありぬべしよさーもらう

ひなをいものゝさまづく法丈なごうに
 て御神乃もぐ免てけ嶋にあとをまされ
 給ふこといとしてやさしく人なみごをの
 ごもごとりよことなす入るめいで
 にほせらるゝことぐもありられを人
 さうず法花經の壽量品をたびく誦
 じたるかづべをうゝあけずとりよこ
 となすあるひいもごうに女房うら

れあやうどよろりて宝殿よむうひた
 まへる姿をえらるるなごや人もありつ
 糸よありとにほえぬにありし神殿乃う
 ちよりかうむくよほひこあまご
 にどろきさをだあひぬ
 又廿八日このわらりの浦くを御らん
 ぎべーとてあまごもういせさせ給
 うらのをちがれうり乃御なをうら

あやれ去ろを渚そ二渚大くちたてま
つらせ給渚をがさいみぢうなまめう
トくつくあうみえさせ給ふうらづ
たひてさしまはして渚らんど穢よせん
のほらもうくやとまうぐうともられ
をりふよやとにほゆる所くのゑにほ
うりえるめなどもてまりるとむうり
渚らんどまちりてうへらせ給ふてな

ごりにほさしうの歌つかうまのれと
ありーうづ
ままうりなころもありに浦たのれ
かかみもあられをうらるゑら波
巴上
○
みやこれつとよ白川に閑よて
都ももいまやふくらん秋風の

東及茶炎長編

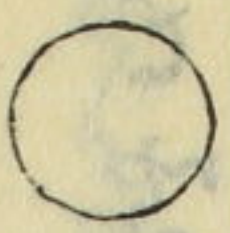
八七

身にーみわさるゑら河此関
それより出羽國へこえてあこや乃松
などえめぐりつみちの國浅香此沼
をとぐ中將實方朝臣くざられらるゑ
げ國よも菖蒲此なうりたれば本文に
水草をふくとあれむりげれもたな
ことなりとてうのこにふたうへらる
とちつゝへゆるゑ寛治七年郁芳門院

の根合よ藤原孝善が歌に

あや免くさひくてもたゆくなうさねの
いうて浅香此沼よたひちん
とよめるいげ國よもあやめ此あるよ
やと年月ふあんなにぼえーういげ度
人にまがねーに當國よあや免のなま
よもあらずされどもかの中將乃君く
だり終ひー時なにのあや免もえらぬ

あつが朝端よといつて都のたぢぢあ
やめをふくべきとてかめをふらせ
られらるよりこれをふたつこつきの
なりとかりけりけりうばぢよもさる一
義も侍るにや風土記なごりふ文よも
その國乃古老の傳なごりきて侍れば
さる事もやとてあつつけ侍るなり
といつり



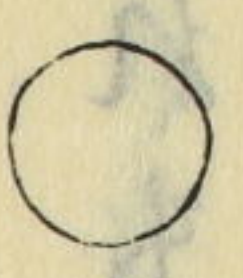
海道記よ曰三河國八橋を渡る八橋よ
あつてよくもてよ物にふ人もむ
うも過ぎや橋柱よけりむらよを
のれも朽ぬるうむなうく朽ぬるもの
も今もすのこく

とみわひて過る三河のやつを
ふゆきてもたちうへらをや

東

東

げをーのうへよにふことちうひ
て赤澄らば何となくろもゆく様
ににほへぬといつり



東関紀行よ曰佐夜の中山をもこえつ
程過初ほどよ菊川とりふ所あり去よ
一兼久三年此秋乃比中御門中納言宗
行とぞえー人の罪ありて東へくざら

れりるよい宿にとまりるるが 昔ハ
南陽縣乃菊水下流を汲て齡をのぶ今
と東海道此菊川西岸よ宿して命をう
一なふとある家の柱にかゝれきり
りりとぞをたれをいとあそれよて
其家をぬるに火れき免よやけてかの
と乃桑ものこらずとやものあり今ハ
かぎるとてのこー置らんかこみさへ

初なくなりになるこそをうなりをせ
ならひいそぐあわれようなり
かきつるうみも今へなうり
あとも千とせと催ういひらん
又神無月廿三日れ曉まで鎌倉をた
ちて都へにもむくは宿れ障子は書付
なれぬれへ都をいそく今終なれと
さきうなりなりを宿うぬ

ひるこや巴上

いざよひれ日記は日神無月廿三日天
アウ乃わうりとりふ舟よのるに西行
がむかーもにもひいでられていそん
ぼそーくみあをせきる舟きぐ一よて
にほくれ人のゆきくにさーうへるひ
まもなく

水の澄乃うきをせよわらる程をえよ

早瀬れ小舟掉もやを先す

又あーぐら山のみちとをーとてをこ

ねぢよかくるなりりり

ゆるーさよそなまの雲をそはたて

よそになーぬるりーうら乃山

又やよひのさあけうーわうくー

わらひやみよや日まげよたこること

二たびになりぬあやーう志あれをて

まもふちーながら三きびよなるべ

あうつきよりたさぬて佛のたまへに

てろーろをーしーて法花經をよる

そのあるーよやなごりもなくたちき

るおりーも都のたよりあればかり

事こそなご古里もつげやるついで

に御をうれきしーとまよとく

連次茶

編

たのもしな身よそふなと成より
をへたる法乃をなれ勢りへ

已上

案ぶるよ或なれ冠註よ曰西行法師繪
詞云東のうごさまへ初ほどよ遠江國
天龍乃わごりにまうりつたて舟よの
まきれば所なりちりよと鞭をもちて
うのほどよかいらわれてちながれて

なん西行うちわらひてうれめる色も
みえでちりくるをといつり



南海流浪記よ曰須磨れ浦乃氣色まこ
とよ月の名所とみえきり

なうれゆく身よりあらすへをまれ浦
とまりて夜半乃月をえてゆり

又淡路國府八木に至りて騎旅れちも

ひまことよろくろほそー
 さらぬさよねさ免れほくる艸枕
 まころむまをふくあらー哉
 又讃岐國に至りてのうちに大師御誕
 生所よ素情して
 ① 毘山岩乃むろ戸よをむ月の
 これおもとよりおたるうさり
 かく西行巴上

① 小嶋北口とさみよ曰にほろこのた
 び乃泔旅のなぐさ免のまぐゆるひる
 詩歌よてぞありーぬ中人も連歌など
 りふことをこのむものよて點などう
 たぐよりにほくや侍りーうごみな
 むげうあうてうへーぬいまも都れい
 でまうちならでへ何事うあらん九月九

日ち室陽の御會あるべたとして短冊を
りり結ちる文人ち右大臣道嗣已下四
韻の詩をまてまのりるまの詩は懐紙を
備せられて次は歌の短冊をかうぜら
れりるとぞべ日ちまいらざりし程は
あくる日一座を中つごまとして奏し侍
まし
宮人れえふ乃たまのいっならん

さのみをよそにさくれ志ら露
やがて清うへーをうたくとへ結ちり
まろりーあみむぐへーなごりみま常れ
こそちれどられいことにふりーみて
ちもまろくぞ見え侍りー
りみえていえふ乃玉もたようせん
さのみをよそにさく乃志ら露

巴上

○
 住吉詣よ曰是よりをみゆにまうでん
 とて天王寺にまちよりふれば聖徳太
 子四天王をくさ免をた給ふ又みげう
 られ御像をまへをさ給ふ石のち居龜
 井乃水なごんまげうよなが免て
 万代をかめ井乃水にむまひをさて
 ゆくも免ぬくわれもたのまん

それよりをみゆにまうりて四社明
 神をたがみまうりて

四方れうみ深きちうひやひのもそれ

たみもゆゝに住吉れ神

け神神和歌の及よんざーふうた人
 をよくまもらせたまふと昔よりいひ
 つゝへ侍りことよ秀歌を好む人これ
 神にまうりて祈誓やせばうならずそ

の乃よかなひなるこそぞ

神代より傳へつまある一に嶋北

みちよころもうとくも有う那

又浄前にまりりていとまやて下向一

傳りぬ

みのうきれいく千代までも初末を

守らせたまへきとより一乃神

び一卷ところぐれさまを筆よまう

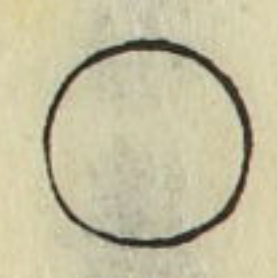
せて書ある一傳りまゝの時乃真にもなる
づ記うとありこのころのころのころのころ

貞治三年卯月上旬

義詮判

鶴千代どののへり

已上



十樂庵記よ曰佛北十快神乃十善よな

連歌茶談義編

二二二

ぞらへて十樂庵と名付侍るハ我をむ
 里の庵なるべし爰も都れ辰己しうを
 む人のころむへハ雲よりたうくも
 のまぐれれど解脱乃んばへあよむ
 なしうらんやその十こころぞふるハ
 なよられりれど我名づくるハハ
 ニとせ三とせ乃このうハ國れうち
 行なひて宮古よりれ夢ある人もあり

まのさげ國よまふでありあれるも何れ
 或ハ國分寺よまむの行脚乃人も侍
 るよ佛乃もころざしあ嶋れるよ
 もんばへあるを十人朝夕のかしらひ
 ぐさねもものしてそれがいへること
 我つぶやきしこころをさむ昔を志
 のぶ文字れをさみとちりぬ國分寺乃
 阿弥陀佛よ百日經書てまいらせし比

佛性院此弘融比丘よ免る

いさねよくふも佛乃國分て

寺井よとめる秋此夜の月

度會宗直入道常可

も一ほ草さのことも身よたをぬ

つみもむくひも神よくの庵さ

頓阿

乃とをく法乃津國へわくのとも

寺をもちをれ臺ともえ蘇

已上

○

鹿苑院殿嚴嶋詣記曰康應元年三月

四日都を出させたまふて摂津國兵庫

此津より津船よりのらせ給ふ百余を

の船どもみなともづなをこくめりそ

れよりゆきくて安藝國むろのそと

りよ所よ至りぬむうー生身れ文殊乃
 沖うほにがまんどちうひくる人よつ
 げありてこれこそ生身の文殊よとて
 け所乃抱女をくーへくる所ぞうーと
 ころれざま後よ面白ー岩ほきくたり
 ーきてそびえきふる峯三四ならびつ
 松柏むろをどりよ深山木こけにひさ
 がりてうさ雲うさくかくれりそれよ

ままさゆきくして備後國尾道よつう
 せたまひぬ沛座よ大寧寺とて天龍寺
 れ末寺なり海中までうた橋うけて沛
 乃とせりなよとなくめげらーうりさ
 いしーにころかさまりー物なれや
 もーほくむてふあま乃うた橋
 かのほこ乃きさまりれ事思ひよせら
 れてよ免るなるべーといつり

○
富士紀行の曰永享第四此年長月十日
公方様富士御覽此を免は東國へ御下
向あり可_レ供奉之旨兼日より被_レ作_下今
暁まうりまち侍りしは相坂乃関をこ
え侍とて
たもひまのふもうれし_一たひころも
君うめくみよあふさう乃せに

又十三日三河國矢矧此里よて今夜乃
良辰月もことよくもりなく晴て名を
あらと_一侍りぬること千載之一遇万
秋之芳躑めでたくたほへ侍りうれバ
君う代まなを名月乃つに此名も
所うらよそひうさ_一そふ

○
巳上

伊勢紀行よ曰永享五年弥生廿日淨系
宮れ日なり夜もまがらぬみり風さそ
ぐしかりし辰乃刻むりそそち
よく晴て浄出の儀ことにありがさく
ぞみえさせれましきる公卿殿上
人馬くらをうざり衛府淨隨身あざや
うなる袖をつら糸て供奉し侍るよそ
ほひきらくしきど侍りし淨神五

十鈴の川上よ宮所をし先高天れ原に
千木高知下つ磐根よ大宮柱廣あたて
まのまりましまを事らむを守り國を
きもち人をまごくむ淨ちひなるを
し今我君豊芦原千五百秋瑞穂國をつ
うさざりたをしきりて神をあが免政
をきとけ民をなでたまふ淨めぐみも
神慮よ隔なくたをしまを太田命れ

八万歳をたもちまゝくして沛子孫萬
をならん事乃いとものこく覚え
まゝに詠進三首

今朝もまゝ天乃八重雲をれより
よれまのぬやみちさよむらん
たよふへー君の齡もよろめと
八重うさ糸一神乃むうーよ
さみもねいくさうけて作るま

高天乃原此神の一免縄

又沛乃中一日もぬれさちりこ中事さ
へ侍らでなりぬぬ天乃も神鑿に
もつなをせねをーまーる事ありが
たく目出度たぼへ侍りぬ

右普廣院殿御系宮此時記之權大僧都

堯孝と云云

善光寺紀行曰酉に刻の斜なるに佛
堂よりうでゆり思もざるよ引導とる
人有て内陣に通夜せり刺本尊に瑠璃
壇をめぐりきまことに多劫の宿縁淺
くらずにほえて歡喜の涙せきあへず
如來本朝御瑞現の往昔までにもひつ
ちて
てらせなを濁りよますぬ難波江の

あまにみえし有明乃月
暁よ乃ぶまでよ月いと清らくにゆり
姨捨山をたもひ居りて
行をらてんそりよふ更級や
姨捨山乃あにに夜の月

已上

○
藤川に紀行曰よりより峠の左に方

よそびえまゐる岩に松一木あるその下
に石塔あり西行法師が塚といひつゝ
へまゐるとなん西行が歌よ
糸うつくもむらもそにてまゑなむ
そのたさらまれもち月のころ
とよあゝることをたもひ出て
いづしうて松のうげよちやとらん
むらもとくういひことのは

巴上

○
正廣日記よ曰を中みづれて後と都よ
ゆをとぐむべきさまもあらで大和
國泊瀬寺にゐる所ありて年月をたぐ
とゆるよ攝津修理大夫元親にあひて
富士見にりりり筆よまうせて十首
よみて富士淺間よちりゆる歌

みーやられ雲間乃嶺はあらまれて
先めりらーた秋れをの雪
富士のねを雲ぬよきー大ひえや
ほらあけてもいつてたよらん

巴上

○
平安紀行は曰ふトれ山雲かゝるまてさ
らにみえず

ころあてよそれうとそえるまら雲れ
八重うさをれる富士乃芝山
都よのぞむ日と山あひ秀たちふさが
まてゆりぬ逢坂山をこゆるとき
猿人よあふさう山をさうりこえて
ゆくもうへるもわらぬころう那

巴上

○

五言古詩
五言古詩
五言古詩

五言古詩
五言古詩
五言古詩

富士歴覽記曰侍従大納言實隆卿
つうのさるる

こえのまのさいうよ悪らんうの乃山
とをた昔もちうさむうーも

今もまのまをうりなるあらまの

うつよちわれの山越

是もむうー曩祖雅經卿あど侍らむ

とてくまを侍りーは宇津の山よて

路分ーむうーのまううの山

あどいもみえぬつる下る

とよめりまの父雅世卿かの山をどを
ま侍りーに雅經卿の歌をたもひいで
侍りて

むうーたよ昔といひーうの山

こえてそ悪ふつる下る

東歌茶談苑編

百六

とつらね傳りーことを遠きむうーも
 ちうた昔もとよ多るなるべー
 又宗祇法師たちをなとりふきをもの
 をむまのむなむげはをくり傳るとて
 よみてつうたー
 を急とをくまよりやうてたもひやる
 きみよなひかむあーのもありを
 うー

おもひまのあーの煙もたちむ乃
 なひくもありはまのやあるらん

已上

○

武藏野に紀行は曰あられは八月十三
 日朝芳いよくふくくーてるもさだ
 うよみえわうず馬にまうせて行長井
 の庄よもつさぬまことやわうむらさ

たれ巻よかゝる船髪をわけいらんと
あるもられなるべし大沢の庄などを
初は庵くくをみづ川もつたぬ川
歌をえればまことに志ろきをなれと
とありとらうまむれぬて魚をらふ
ありさまむうしをちもひいで
みやことり角田うたらは船をたれと
ましくその人の名のとありたら

巴上

栗田口猿樂記よ曰式三番にねさなの
あげまたやどりくそうまふも西方
呂なり呂律此中も呂もことに從言な
る抑猿樂とヤ事皆人狂言綺語乃戯と
のみたもつりそれさらけ讃佛乘の因
なるべし然も我朝神道の隨一もて侍

連歌茶談

るはつとそのみなもこそをちさびあまて
 るにほん神あま乃岩戸は引こもらせ
 給ひし時やをよろの神をち歌をう
 たひ神樂をそうし給ひるより岩戸
 もひらけむもあきらうよちりーうバ
 神をやもらげむをたさむる事あさる
 に過きることあらどされば今よりこ
 るまで神は屋しろ乃まへそのづくり

の人れ家よても後言のそど然よあこ
 星にこちふならひよて侍る又うきふ
 とちもととより歌をうきふよて侍れ
 ば歌をい國乃風俗をればとりわたりや
 まとうたよてぞ侍る目にみえぬ鬼神
 をもあらそしきうけさものふれあそ
 れをばせむるられ歌なりと貫之が筆に
 あそぶるもとにほえきりそのうち人

連歌本言及終

百六

乃を成て上宮太子などここになら
せせつへたすふ事より佛教も見え
え侍れば夢にも歌舞ればさのなり又
あるも女此姿をえせあるも夜又乃か
まちをあらはせども事をとりぬれば
もとの身なりさても第四日六番をてく
狂言れほどに芝居よりうへで乃枝よ
短冊をむまびてさんどされこそこのう

ちへさー入侍りとりてるれハ繪など
いとりのくーく書をみるたんざくに歌
もなくてまむまび付てぞありたる
扱まはまんざくよ歌うきてそのぞみ
侍る事よやと朽もひたまつるよられ
ハ兒をち若流なども侍る中こそうく
いひ出ぬまりふにまさりまゐるんむへ
よやさうつりてめがらうにもんふり

くもねがえ侍りし見達れさんど記の
字えよて懸びて准后乃わさらせ給ふ
に作うけて紙て書てつうをを贈答よ
て侍ればこと短冊よてこそと申事に
て硯短冊などふどころよかくしきる
わう記人くとり出しひし免をあつり
ける筆も無量壽院僧都なる巻し
何とさてかもしもせすしよの系れ

はなも思ひ乃色しみるねん
今れをよきうあうの事もさうあるん
ちして侍る又新来もかゝるころ
づうひきれくも侍るべきとてある
しを記侍るものなり
永正第二仲呂前法性寺座主大僧正誌
大永元年霜月中一日書寫之 尊祐
書絶てあとも免しとねのふをよ

うた水くされもーやせらん

大相國乃みちれ記

○ 大相國乃みちれ記

九州乃みちれ記曰大相國もろこー
かこむけさせたまんとして天正れを
るのうと筑紫に沛出有べきよー事さ
だまりよくれバ日れ本の兵のこらず
供奉をみづうらもむ月乃中れ五日比

よ京を朽もひ立あんとー侍りたるに
人のもとよりたむそ獨ーてまきあふと
てけ二首をあんくをへられまうりたる
玉銚乃みちの山風さむうらひ
かこつてらにさあんとそあふ
あまのよひぬひうさねくとから衣
朽もふろろちへよそありたる
彼にむそえならぬものがうりのう

在中も我も何をうなまを乃原
 ちよとわさもなく年やへぬるさ
 などいひくして歩過るるよ上野をも
 をだて信濃國よ入ぬ淺間だけよ
 あり乃まのをえて我んにたもふ人れ
 事を思ひてよみりる

志なのちる淺間れたけも何をたもふ
 我のともぬをこうきと思へば

巴上

玄昔法印をいきめることばよ曰まこ
 とよげ及れれひとまたちみことこのりを
 うけたまつり和歌のうらまへてひろ
 へる玉れうどくくやくちもこよも
 邊ぬらんうゝ家の風うけらをたけり名
 の月不まれをむときなくまゆる中よ

も五條乃まうちをみより京極黃門れ
一なぐれ其またえずして玄旨法印ま
で正き筋をつゝへちるまたまつりと
ぞまことよあふぐべーまうとまざらん
やの過より八月十日よかられ終ぬれ
ば定家卿の正忌にさへ何うまよりり
さるべちちざりやありらん西行法師
がその二月れとよこて預みてきりー

を彼卿を月乃比ちたがらぬとやとふ
らひ終るかさぐ有難埋れぬ名もさ
こそいつときのもーくて
かえらすよきその名も小倉山
あされ十日よさえー月新
惜を哉たーくやのあらぬまうつり
何きをさねこ葬人乃別も

巳上

連歌茶談

百廿六

阿多物語上北一よ曰古今の序に花よ
鳴うぐひをともしいすへ孝謙天皇は
浄代に大和の國をかま乃寺よ住僧の
寂愛乃うのくーを童子ありーがほど
なくみまうりて後三年は表童子うぐ
ひをとちりて朝端の梅よさうり初陽
毎朝來不相還本栖とちりたぬきを文字

ようのーてふれが
ちのほのあーたごよさうれども
あをでぞうへるもそのをみうに
とりぬ歌なり又水よをむ蛙とちむう
ー壹岐守紀良貞とりぬ人住吉にまふ
でわをれ草つちる木陰よ美女一人を
てり良負けさうーたればかさねて寂
にさうまへあひるんとちぢりてう

連歌茶談編

百七

みよたちうつりぬ又此奉たところゆけ
どありー女もみえずたりーも砂れう
へをかちげのまへわらうとるあとを
ふれば
住吉れ浦乃みる冬もわきれ縁バ
くりも人にまこととれぬる
とりふ歌の文字有りけ時さてきあり
ー女も蛙よてありつらんとくあるん

もやとらるとなんといつり
案どるよけ説も古今集れ本意よるあ
らざといへどもえをてぐさたがゆへ
に爰よ寫置ものなり

○
續崎人傳第二よ曰臨江齋紹巴も南都
の人よして連歌を大東正雲に学びー
が後よ周桂にちこがひて妙よ至りそ

のち豊太閤此時よあひて志をく
うへまみをかみむり其名まをく
し生得媚へつらふんなき人よて或時
太閤の沖前よ侍りよ公

たかく山よもみぢをかて啼 螢
とりふ白をなされて懐紙よある世と
作ありよ紹巴頭をありて沖白よ
たをよさむらへど季もたがひ螢此な

くどやことい有まど事なりとて筆
をどらず公も色を變じたまひそれよ
てもろろろらずと作せられどい
よもよろよからぬよ
此沖詞をうへをゆの四海のうちよ
なうりたるにうくあらそひ中を玄音
法印いまど藤孝といひ一時よて座に
ありいや螢も所よよとてなくものよ

やうぢれの集より

おむさしーの志れをつうねてあるぬよ
螢より外なく虫もなす
とちを御白よろしくらんと取なすけ
れば公それえよと作らるに紹巴もこ
とばなくて筆を染もつとさてその翌日
藤孝れ沛もとよ系りてさのふ乃歌ハ
めぢらーさことに侍る何れ集は雅人

の所為よやと尋られれば大笑ひ志
をまひ律義なる人うぬあれなうなる
歌がりぢくよあるべきあれいわぬ
が首をつたまるなりけ後何事を作と
ともうまへてあらそをるしなといま
し免たまつりさればまゝ或時は公
谷うげよ鬼百合艸さ記て首ぐなり
といふ白を作たまふとさ紹巴二三遍

沈吟していうも神妙此御台なりと
て懐紙よあつきを免られ公紹巴が教
を御覽ト堂へなうざらましう百合艸ハ
ぐなりとせしうと作たまふ時紹巴よ
ろしと例もゆ慈鎮和尚
まくとどぐ原よ風さわぐなり
と作られゆとやられバ不斜奥トたま
ひ紹巴ハうしこきゆのなりと作る

とちのちのちに紹巴終季れ比と慶長五
年なり玄仍玄仲などりゆ子ありてい
づれも連歌れ名匠きるといふり
案どるよ天正年中高野山百韻の連歌
よと太閤秀吉公れゆも數多あり又山
州名跡志都名所圖會南畝莠言等にハ
秀吉公乃よと歌うとく載をりけ傳
の趣も諸抄と異なるよ交よるぬる

雨ごひれ和歌祭句を出さん

能因法師

天のうの苗代水よせれたくせ

あまもりまを神ならもみ

肖柏法師

そらよちるやぬをのぞみの秋れ雲

宗祇法師

桐乃葉よぬをうごうせあをれくも

案どるよ和歌も祭句もごとくにその時

よまんで感應ありー中詞書よみえを

ま亦老衲が文化八年のなみむさーれ

宝珠山よたぬてぬをこひー時

たみくさるゑふごころそくち夏れ雨

おりーも水無月れちど冬めくさよて

スーく日でりゆるーゆくさぐくの

東歌集

卷之三

和歌のたしなむ
○百七
ももまほるしむりみえりるころ祈
雨れ日數も七ヶ日なりしうち後乃三
ヶ日潤澤もあふりて郷外までもよろ
こびより又ちなみよ俳諧の榮白れ
感應ありしとらふをいさ
夕立や田もええぐりの神ならむ其角
案むるにこの立れ字も古來をちた
つきて乃三訓あるなりたての訓にも

あろし
又止雨れ祈りの和歌を一首いさ
鎌倉右大臣
と記より選れん民乃歎きあり
八大勢王あえやめたまへ
已上
○
和歌れちけのあうなりとりふ歌

連歌集

卷之三

を巻軸よ出さん

なれちのよさくやこの花をこのり

今いまよとさくやこれを那 王仁

あさう山かけさつえゆる山乃井の

あさたふのわうおもをなくよ 采女

巴上

案どるよむうーもよならひのもど免

よもいろは戎習ふ事へなくてい二首

れ歌をならひるるよや源氏若紫巻に

源氏中將北山よて紫上にさなををえ

て文つうをーたまひーに祖母乃尼公

中々難波津をたよをうく志くつ

け侍らぬといり其比も難波津の歌

を習ひるるとあられまより以上古今序

季吟註本れろろあり

右に一帖と連歌茶談前後續三編
找むさゝの延命寺よにわて再治
乃時志ぢりれを志ばらくのこ
をさゝが亦とらとあひ免て残編と
号し眷屬等に阿まあるも此なり
愚老が婆んかく乃ごこし来者乞
成察とるる云云

白雲堂無相

附録

- 抄物作者此事
- 一土佐日記と貫之延長八年十二月廿一日よる翌年二月十六日迄此日と乃作りて一卷あり
- 一高倉院嚴嶋御幸記と土御門内大臣通親公治兼四年初春よる四月八日まで此作りて一卷あり

一 檜垣姫集と一卷ありて奥書に曰元
 久二年五月廿九日校合畢從三位平
 朝臣と云云
 一 海道記と源光行貞應二年四月をト
 免よる五月上旬迄に作るて一卷
 あり
 一 東関紀行と前河内守親行仁治三年
 八月十日よる十月廿三日までの作

一 ありて一卷あり
 一 南海流浪記と正智院道範阿闍梨正
 嘉二年に作るて一卷あり
 一 いざよひの日記と阿佛房建治三年
 に冬よる弘安三年乃春までの作よ
 して一卷あり
 一 悦目抄と基俊に作るて一卷あり
 奥書に曰正安元年二月十七日前大

東関紀行

悦目抄

納言爲世と云云

- 一 奥義抄と藤原清輔乃作りて上中下三卷之上と本末あり中下に上中下有り都合八卷之奥書と曰正和五年以清輔朝臣自筆之本書寫と云云
- 一 都此つとも僧宗久觀應年中此作りて一卷あり
- 一 小嶋乃口とさみと後普光園攝政関

白良基公文和二年文月より長月迄此作りて一卷有り

- 一 十樂庵記と頓阿法師貞治三年二月下旬此作りて一卷あり

- 一 仙傳抄と作者を志らず一卷よりて奥書と曰ひ仙傳抄と三條殿御秘本頼政公依御所望文安二年三月廿五日富阿弥相傳といつり

- 一 善光寺紀行と堯惠法印寛正六年此作より一巻有り
- 一 藤川紀行と後成恩寺関白兼良公文明四年此作より一巻あり
- 一 正廣日記と文明五年此作より一巻有り
- 一 平安紀行と源持資文明十二年此作より一巻あり奥書に曰右に紀行

- 者太田道灌入道平安之筆記也と云
- 一 富士歴覽記と中納言雅康卿明應八年五月此作より一巻あり
- 一 猿樂記と前法性寺座主大僧正永正二年此作より一巻有り
- 一 狂歌合と作者をえららず一巻より一題下に云永正五年正月二日衆儀判後日加判者詞とあり

- 一 御撰何曾と一卷ありて終り永正十三年正月とこれあり
- 一 武藏野北紀行と北條氏康天文十五年乃作りて一卷あり
- 一 蒲生氏郷紀行と文錄元年北作りて一卷あり
- 一 玄旨法印をいそゑることばも作者をえらばず一卷ありて終り慶長十五年

年記之とあり

- 一 阿多物語と平爲春北作りて上下二卷あり寛永十七年の梓行あり上
- 下とも一ニを分て四卷あり
- 一 續畸人傳と閑田廬蒿蹊寛政八年北作りて五卷あり
- 一 枕艸紙と清原元輔北むを免清少納言乃作なり北村季吟云い草子異本

さまづくり或ハ二冊或ハ三冊或
ハ五冊一決志がさといふり
一更科日記と常陸公菅原孝標朝臣女
此作りて一卷あり
一馬内侍集と一卷りて終に右馬内
侍集以村井敬義本校合と有り
一今物語と前右京大夫信實朝臣此作
りて一卷あり

一うきね此記と阿佛房の作りて
一卷有り
一いほぬ志と増基法師此作りて一
巻あり大納言爲氏卿真蹟と云云
一にほひのまゝり日記と後普光園撰
政良基公此作りて一卷あり
一富士紀行と贈大納言雅世卿此作り
て一卷有り

- 一 夢庵記と肖柏法師此作りて一卷あり
- 一 吉野記と飛鳥井前大納言雅章此作りて一卷あり
- 一 道ゆ記ぶると鹿苑院殿巖嶋詣記と
- 一 前伊豫守貞世朝臣此作りて一卷づあり
- 一 艶詞と入道大納言隆房卿此作りて

- 一 九州のみち此記と豊臣勝俊朝臣乃作りて一卷あり
- 一 け編れ中よ和歌を何中よのせてききそのよと人乃名のみをあらわして抄物此名をいむざる事と八代集の中乃歌をるがゆへなり
- 一 八代集を往くにうさのまると

通可本言死終
〇百三十一
どもけ附録此中よりその作者等を出さざるごとへ茶談後編乃中に二十一代集の撰者ならびに年月巻數等を委しく候むるがゆへに八代集も其中よりければ今爰より略して録せざるなり

一 前後續三編此附録よ出せるところ乃抄物と今け残編の附録より略し

て載ざるなり

一 續編ならびに編此抄物作者の事より多分群書類従より載せる所なりを案むるに類従より温古堂老人此たまものよりして六百七十冊ありかくれごときの大部なるもの、速は上木成就せし事より實に天満宮乃擁護のりやあるらんきふとむる

疾政七季
似日辛未



